

教育現場にも新しい風を

～一人ひとりの“らしさ”を認め、
明るい未来となるように～

「都留市男女共同参画推進委員会」では、地域に男女共同参画の取り組みを広げていくための活動を行っています。第13期推進委員会では、子どもたちから男女共同参画について考えてもらう取り組みを進めています。

今回の機関紙「はばたき」では、都留文科大学教職支援センターで特任准教授としてご活躍されている阿部真一教授と教職を目指す4名の学生にお話を伺ってきました。

問合先 地域環境課 地域振興担当

今回のアドバイザー

阿部 真一 特任准教授



東京で40年間、中学校の教員を務め、令和5年4月より現職。教職支援センターにて、学生支援と若い教師の置かれている状況と支援について研究する傍ら、卒業生の若手教員の支援として、全国各地を回り交流会を開催している。

参加した委員と学生



藤江委員 高橋委員 佐藤委員長 海野委員
木戸場 凜さん 野地 美里さん 阿部 真一教授 岩井 愛彩さん 白瀧 佳那子さん

「都留市男女共同参画推進委員会」は何をしているの？

都留市男女共同参画推進委員会は、公募や地域で活動する団体の方など、さまざまな属性の委員から構成され、現在は12名で活動しています。

平成12年度から都留市男女共同参画推進委員会として活動を始め、どのように地域に男女共同参画の取り組みを広げていくか協議を重ねながら啓発活動などの事業を行っています。

今年度の委員会では、性別にかかわらず一人ひとりが認め合い尊重しあえるような社会を目指すため「人権」をテーマに活動を進めています。

学校における男女共同参画の現状とは

学生B ランドセルの色や髪の長さなど、ジェンダー※による性差は子どもたちの中では少なくない、自分らしさはどんどん出せていると思います。一方で、大人たちは「男・女の子らしくない」といなど、きつと無意識に言っているのが現実だと思っています。

学生C 受けてきた教育は抜けないと言われるように、教員もそのような教育を受けてきたからこそ、そうせざるを得ないのだと思います。

学生D 教員は職業における男女格差は縮まっていますが、子どもたちをみる視点では男女共同参画は進んでないと感じられます。

学生A 「男・女らしくない」と教員が言うことにより子どもたちのジェンダーの考え方が狭まる懸念があり、注意すべき点です。

学生E 社会に出た際の男女共同参画の価値観は学校において形成されてしまうこともあると思います。

ジェンダーとは？

社会や文化によって作られた「男らしさ・女らしさ」のこと

阿部 学校現場に40年間いる中で、男女混合の名簿や、技術・家庭科を男女ともに学ぶなど、男女共同参画は徐々に進んでいると思います。また、技術の進歩により、力を必要とする作業が減り、さまざまな場面で可能性が広がった側面もあると思います。

そして、若者たちが男女共同参画の意識を持つことで、時代は変わると前向きに考えています。

「保護者と教員は子育てのパートナー」 ー保護者と学校のかかわりー

佐藤 男女共同参画推進事業を学校に導入しようとするときに、学校側はもちろん、特に保護者に了承を得るということに関して壁が厚いと感じることがあります。

阿部 最近は学校に子どもを預けた時は「学校側の責任」という捉え方をする方が増えた印象を受けます。一方で、過去の（校内暴力等）非行問題が社会問題になっていた時代では、学校と保護者が一緒に頑張っていかしようにという風潮がありました。

佐藤 親の世代の意識改革は必要だと思うのですが、なかなか難しいと感じます。



海野 保護者や子どもに関わる周りの大人によって子どもの生育や人間形成的な部分が大きく変わるのではないのでしょうか。

阿部 子どもに悪い子はいません。周りの環境が子どもに大きな影響を与えます。私が教育現場にいたときには、家庭環境に関する多くの相談を子どもから受けました。

相談を受けているうちに学校教育は教育が3割、福祉が7割であると実感しました。しかし、現在では教員が多忙であり、子どもを受け止めたとしても受け止めきれない現状があります。このような状況下だからこそ保護者と教員は子育てのパートナーであるという共通認識が重要だと学生にも伝えていきます。

男女平等の意識を広めるために

学生C 過去の経験から作られた価値観は一撃では変えることはできないので、地道に意識改革をしていくしかないと考えます。

一方で、一人の力で改革を行うのは難しいため、男女共同参画に関わる人たちの協力体制が必要だと考えます。

学生B 子どもたちが「性別による差はない」と伝えられながら育つ中でも、出世や、給料の男女差などで制限がかかってしまう現状があります。子どものうちに教育を受けたとしても、制度などが変わらなければ男女共同参画の社会は作りにくいと感じます。

学生D 私たちが受けて嫌だったことは次の世代に繋いではいけないと思います。

藤江 女性しか出産できないなど仕方ない部分もあると思うところもありますが、俺は男だからと自ら主張する子どももいると思います。全部含めて、一人ひとりを認めあえるような意識を持つことができればいいなと思います。

救急医療情報キット

もしものために
活用しましょう！

本市では、高齢者や障害者などの安全・安心を確保することを目的に、自宅で急に具合が悪くなり救急車を呼んだときなどに、本人の医療情報をすぐに正確に伝えられるよう「救急医療情報キット」を無料で配付しています。もしもの時に備え、ぜひご活用ください！

救急医療情報キットとは？

かかりつけの医療機関や服薬内容などの「医療情報」、緊急時の連絡先などの「救急情報」を記入した用紙（救急医療情報シート）を入れる、筒状の容器です。

ご自宅（冷蔵庫）に保管して、救急時などにかけつけた救急隊が必要な情報を確認し、スムーズに医療機関へ搬送・情報提供を行うためのものです。

対象の世帯

本市に在住し、次のいずれかに該当する方のいる世帯が対象です。

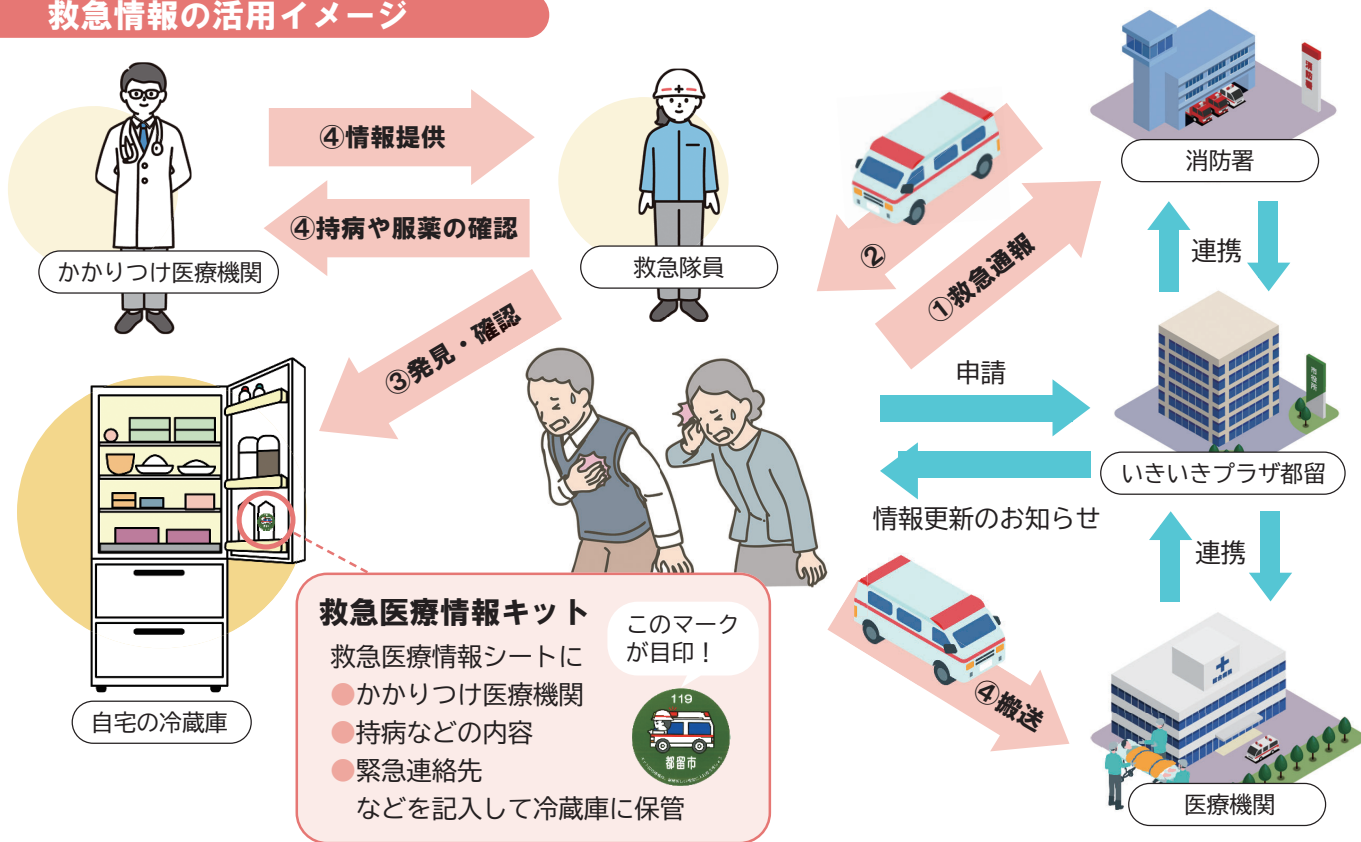
- 65 歳以上の高齢者
- 身体障がい者手帳 1 級・2 級・3 級を所持する方
- 療育手帳 A、精神障がい者保健福祉手帳 1 級・2 級を所持する方

キットの内容



- 救急医療情報シート
- 容器
- 玄関用シール
- 冷蔵庫用マグネット

救急情報の活用イメージ



情報が変わったら、内容を更新しましょう！

医療情報、介護情報、緊急連絡先などが変わった時は、救急医療情報シートの内容を更新しましょう！

用紙は市HPからダウンロードできるほか、右記の場所でも配付しています。

配布場所・問合せ

福祉課 地域福祉担当
(いいききプラザ都留 1 階)

※申請書を提出、内容を確認後、無料で配付します。

※代理人の方が申請することも可能です。

●CAP（キャップ）とは？

Child：子ども Assault：暴行 Prevention：防止

子どもが虐待や性暴力などのさまざまな暴力から自分の心とからだを守るための予防教育プログラムのことを指します。ロールプレイを通して考え、話し合いをします。周囲の大人も暴力に関する共通認識を持ちいざという時に備えるため、大人と子ども両方にプログラムは提供されます。

こんな活動をしています！

CAPおとなワークショップ



1 月 31 日におこなわれたワークショップでは、委員をはじめ、民生委員や学校教諭、看護師、大学生の 18 名が参加し、暴力について、暴力をなくしていくための理念・考え方と、ロールプレイを通して暴力を受けたときの対処法を学びました。

子どもの周りにいる大人自身が人権感覚（自他を大切に思う感覚と、それが侵害されるのを許さない感覚）を磨くことで、あらゆる暴力に気づいて子どもを守ることができ、子どもの人権感覚を養うことができるという気づきがありました。

子どもも大人もまずは自分自身を大切にすることが、他者を大切にでき優しい世界へとつながると感じました。



暴力防止教育について

高橋 子どもへのいじめ・暴力防止、子どもの権利を守るという視点で今年度はCAPに取り組みんでいます。

海野 学校で暴力予防教育を取り入れることに関して、どのようにお考えでしょうか。

阿部 CAPは学校で行われるといいなと思います。また、子どもはいくら実践活動しても自ら声を上げることが難しい時もあります。ですから、大人が子どもの異変等をすぐ感じ取れるためにも実践活動が必要だと思っています。

佐藤 CAPの良い点は子どもと大人の両方が教育を受けることができる場所ですね。

学生A 虐待などの暴力は、個人の問題とせず、社会全体の問題として向き合っていくべきだと思います。

藤江 CAPはまだ知られていないのが現実ですが、取り組む意義があると思います。

阿部 PTAの活動など、学校と保護者の両者が興味を持ってこれたら広がっていくのではないのでしょうか。

対談を終えて

大人が子どもに「男・女らしくしなさい」などといった考えを押し付けていたり、社会の制度が性差を感じさせている現実があり、大人たちが率先して意識や社会の仕組みを変えていく中では若者の柔軟な考えに耳を傾けるべきだと実感しました。

本インタビューの中で、子どもの意識を変えるにはまずは大人への啓発が必要だという意見を受け、子どもに関わる大人が対象の「CAPおとなワークショップ」の開催に至りました。

また、今年度で13期の委員会としての活動は終了しますが、性別にかかわらず一人ひとりが自分らしくいられる社会を目指して、人権感覚育成への活動と併せて若者の声を聞きながら今後も都留市の男女共同参画推進事業を続けていきたいと思っています。

